

血液がんの後発薬値下げ

すこやか
ぜみ

血液のがんの一種、慢性骨髄性白血病（ＣＭＬ）の治療は「分子標的薬」の登場で大きく進歩した。だが薬価が高く、ジェネリック医薬品（後発薬）も普及せず、患者の経済的負担は大きい。そんな中、大原薬品工業（滋賀県甲賀市）は後発薬を値下げした。

患者の自己負担を軽減

慢性骨髄性白血病

先発薬と大原薬品工業の後発薬の自己負担金額
※治療初年度の70歳未満に対する標準的な処方

年収の目安	先発薬	後発薬
約1160～	約106	約29
約770～ 約1160	約87	約29
約370～ 約770	約42	約29
約370以下	約35	約29

(単位は万円、同社の試算による)

があるが、「治癒を期待できる人も出てきている」と木村晋也佐賀大教授は言う。例えば、血液細胞の異常増殖を促す遺伝子の検査が2年以上除性の人で服薬を中止し、約4割は5年以上再発しなかったという報告もある。

普及阻む壁

課題は患者の経済的負担だ。先発薬の薬価は約2300円。1日に4錠服用なら1万円近い。2014年に半額ほどの薬価で後発薬が発売されたものの売れ行きは低調だ。現在17社が販売する後発薬のシェアは1割を切る。

国庫にも好影響

同社は昨年度から後発薬の卸値を下げ、4月の薬価改定で薬価もできる協力をしてが他社の後発薬の半額

ほど、先発薬の約2割となった。住民税非課税の人の一部を除き、自己負担は先発薬よりも軽くなる。

試算では、この薬価で後発薬が全体の8割を占めると年間の薬剤費は112億円減り、国庫負担も32億円減る。「高額な薬が増えており、それら後発薬で置き換えるための研究に、減った分の一部を回す仕組みも必要では」と木村教授。

木村教授は大原薬品工業の依頼を受け、細胞やマウスで効果も同等であることを確認し、日本薬学会の雑誌に発表した。「今後も治療成績の解析など地道な研究が必要だ」

異常増殖抑える CMLでは骨髄にある造血幹細胞の遺伝子に異常が起き、白血球など血液細胞が無制限に増殖する。1年間に新たに診断される人は10万人当たり1.5人、国内の患者数は約1万4千人に上る。治療には骨髄移植など造血幹細胞移植が有効だ。ただ、年齢制限やドナー（提供者）不足から、かつては抗がん剤治療が主流で、効果が不十分なため、ほとんどの人は数年で亡くなっていた。

国内の成績は、診断から10年後の生存率が93%と良好。原則として生涯飲み続ける必要

標的薬のメシル酸イマチニブ（商品名グリベック）が登場し、治療に革命をもたらした。血液細胞の異常な増殖を促す細胞中のタンパク質に結合し、働きを抑え込む薬だ。

